A群溶血性レンサ球菌のT型別について

A群溶血性レンサ球菌感染症は、1999年4月1日より施行され2003年11月5日に改正された「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律(感染症法)」において、5類感染症（劇症型溶血性レンサ球菌感染症は全数把握疾患、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は小児科定点把握疾患）の対象疾患であり、さらに病原体サーベイランスの対象となる疾患になっています。これら疾患の起因菌は、*Streptococcus pyogenes*（グラム陽性の球菌）であり、劇症型は手足の筋肉等の軟部組織に壊死性の炎症を伴う重篤な症状を呈します。咽頭炎は主に小児に多く見られ、その他に扁桃炎や猩紅熱、続発症として急性糸球体腎炎、リウマチ熱等を発症することがあります。

当所では、病原体サーベイランス事業として小児科定点から送付された咽頭炎症状患者の咽頭ぬぐい液からA群溶血性レンサ球菌の分離をおこない、分離された株についてその疫学的指標であるT型別[*1]をおこなっています。これらの結果は、衛生微生物協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンターに報告しており、全国のデータがまとめられて国立感染症研究所のホームページで報告されます。[1)]

今回は2007年と、2008年4月までのA群溶血性レンサ球菌のT型別結果を報告します。2007年1月から12月に受け付けた16検体から分離された株は計8株で、T4型が多く見られました。2008年1～4月に受け付けた24検体から分離された株は計20株で、T4型、T12型が多く見られました。（表） 全国の分離状況を見てみると、2007年はT12、T1、T6、T4が多く分離されています。2008年は4月18日現在でT12、T1、T4、T25が多く分離されています。[2)]

表 病原体サーベイランス検体から分離されたA群溶血性レンサ球菌のT型別結果

菌 型	T1	T3	T4	T6	T12	T13	T25	T28	計
2007年1～12月			4	1	1		2		8
2008年1～4月	1	1	5		7	1	3	2	20

[*1] T型別とは、A群溶血性レンサ球菌の菌体表層に存在するT蛋白の血清型別のことで、疫学調査の手段として広く用いられています。

[1)] 国立感染症研究所 第28回衛生微生物技術協議会溶血レンサ球菌レファレンスセンター会議資料 http://idsc.nih.go.jp/pathogen/refer/str2006.pdf

[2)] 国立感染症研究所 感染症情報センター http://idsc.nih.go.jp/iasr/prompt/s2graph-lj.html

【 細菌担当 】